

平成27年8月1日(土)

老球の細道151

『アスリートたちの英語トレーニング術』

会津バスケットボール協会 室井 富仁

1978年10月「バスケットボール世界選手権」を観戦するためにフィリピンのマニラへ行った。私にとって生まれて初めての海外旅行だった。英語を話せず、行動エリアが狭いまま終わってしまった。数年後コーチ研修でアメリカに行った時、デイズニーランドで「コーヒー」を注文しても、発音が悪かったせいか「コーラ」や「クアービール」を出されてしまった。それからずっと思い続けてきた「英語を自由に使いこなしたい」と。

この目標を達成するためにとても役に立つと思われる本が岩波ジュニア新書から出版されている。『アスリートたちの英語トレーニング術』。今夏もドイツで「バスケットボール・ユーロキャンプ」が開催される。過去に会津から何人も的高校生が参加している。今年も高校生と指導者が3名参加する。すべて英語で運営される。このように外国においてのバスケットボール研修ツアーが容易に参加できるようになった現在、英語を自由自在に使いながら有意義な研修をしたいものである。

本書に登場するのは、ソウルオリンピック(1998)の水泳100メートル背泳ぎでバサロ泳法を使い金メダルをとった鈴木大地、ロサンゼルスオリンピック(1984年)で日本人女子で初めてマラソンに出場した増田明美、オックスフォード大学にも留学した元ラグビー日本代表選手の箕内(みうら)拓郎、ソウル、ロサンゼルスと2回のオリンピックに出場して日本マラソン史上最高の選手と称された瀬古利彦、そして4回のオリンピックに出場したレスリングの太田章である。夫々の英語トレーニング法が解説されている。

一流と言われる人たちは皆例外なく努力を積み重ねている。5人の元トップアスリートたちの工夫に満ちた努力を簡単にまとめると次のようになる。

- 1・自分の得意な分野を英語と関連づけて考える。
- 2・外国へのあこがれを大切にする。
- 3・音楽や映画を利用して耳から学ぶ。
- 4・英語以外の言語も学ぶ(フランス語、イタリア語)
- 5・英語で何をしたいのか具体的に決める。
- 6・中学、高校で学んだ文法知識を生かす。
- 7・計画的に学習する。
- 8・積極的にコミュニケーションを心がけること

また、この本の中で、「外国語を話せる」ということを次のように説明している。

- *自分が活動している範囲の中で、その言葉で会話を何分か続けることができる。
- *相手が言いたいことがわかる。わからないときは相手に確認できる。
- *自分の考えや気持ちを要領よく説明できる。
- *相手の話に質問を投げかけて、話を発展させることができる。
- *相手に賛成したり反対したりでき、その理由が言える。

勇気ある人間は現時点でできないことを認め、自分の可能性を広げるためにそこに敢然と立ち向かう。英会話も同じ。Learning how to learn is life's most important skill.

「学び方を学ぶことは人生で最も重要なスキルだ」(トニー・ブザン 英国著述家)